

生きていくだけで

鍵山その子（埼玉県）

期限が迫っていた。3月末までに何とかしなければ…。

4月から小学校に入学予定の長男には、卵と乳のアレルギーがある。事前の問い合わせでは除去給食で対応可能とのことと安心していった。直前になり詳細を話し合った結果「あまりに厳しい除去のため対応できない。何かあったら責任が取れない。弁当を持参してほしい」と言われた。え!?入学まであとわずかだった。

私自身7年の育休を終え、4月から教師として復帰予定だった。それに伴い転居し、夫は単身赴任をする。4歳の次男と1歳の長女は保育園入園が決まってい

た。あてにしていた同居予定の母は環境の変化から老人性うつ病になり要介護2の認定を受けたばかりだった。

そんな状況の中、毎日の弁当作りはかなりの負担に思えた。何よりも皆と同じものが食べられない息子の心中を思うと切なかつた。転居のため友達ちもいない。孤立しないだろうか。

私は息子のため戦うことを決意した。除去給食を実施している地方公共団体を調べた。同じ立場の母親から話を聞いた。学校に出向き校長や栄養士と話し合った。役場へ何度も足を運んだ。業者とも交渉した。思いつく限りのことをした。当時の私は思い通りに進まないいらだちと焦りでいっぱいだった。

そんな矢先、茨城で被災した。公園で遊んでいた。ゴーツという地響きと共に地面が揺れた。地面が壊れたという表現の方が合っている。それからしばらくは

停電、断水が続き不自由な生活を余儀なくされた。

テレビのニュースで悲惨な状況が報道されるたび胸がつぶれる思いがした。特に食料の配給場面には目が釘付けになった。もし息子が避難所で生活していたら何を食べられるだろう。ほとんどのものが食べられなかった。しばらくして給食が再開されたとあったが、パンのみのメニューに愕然とした。食べられない。被災地にも食物アレルギーの子はいただろう。どうしていたのかと心が傷んだ。

と同時に初めて気付いたのだ。今までしてきた戦いは何て愚かだっただろうと。給食にこだわり、何が何でも除去食を作ってもらおうとしていた私は、自分のことしか考えていなかった。毎日弁当を作らなければならぬこと、皆と同じように給食が食べられないこと、息子にアレルギーがあること等、全てが私を不幸にしていた。け

れどその考えは間違っていた。私は不幸でも何でも無い。食べられるだけで幸せ。生きていくだけで幸せ。3・11での経験は私にそれを教えてくれた。

さて、現在。小学二年生になった息子は、「ママ、今日も給食全部食べたよ。おかわりしたよ」と毎日元気に帰宅する。入学当初は弁当を持参していたが、今では除去給食で対応してもらっている。戦いの成果ではない。学校関係者の理解と善意によって徐々に実現したことである。

